

天童寺世代考(三)

吉田道興

如浄八一六二—一二二七

近年、鏡島元隆先生を軸として若手研究者による「如浄研究」が盛んであり、種々の事柄が解明されつつある。鏡島先生の著『天童如浄禅師の研究』（春秋社、昭和58年刊）は、そうした研究成果の一つである。以下、主にこれを参照しながらまとめてみよう。

如浄の伝記史料では、第一に『如浄語録』が挙げられる。数種の異本が発見され、その対照と内容の解明が鏡島先生の前掲書になされている。次に道元禅師撰『宝慶記』、同じく『正法眼蔵』（行持・嗣書・面授・梅華・眼睛・仏道などの諸巻）・『永平広録』、枯崖円悟の『枯崖漫録』、さらに無文道璨の『無文印』『無文道璨語録』、そして『続伝灯録』（名のみ。無録）以下の灯史類が補助的史料となるであろう。なお面山瑞

天童寺世代考(三) (吉田)

方撰『天童如浄禅師行録』は、延享元年（一七四四）に刊行され、唯一まとまった紀伝であるが、『如浄語録』の記事を基に立伝されている。その点、中国でも同様であり、既に十四もの灯史・僧伝が知られている（註に列記す）。

如浄の出生年時と出身地に関しては、諸説あって次の如くまとめられよう。

まず出生年時は、示寂年時によって逆算されている。その示寂年時に三説がある。

- (1) 大宋宝慶三年七月十七日示寂
- (2) 大宋紹定二年己丑七月十七日逝
- (3) 大宋紹定元年戊子七月十有七日

この中、従来は(3)の紹定元年（一二二八）〔面山撰『如浄禅師行録』〕説が定説として用いられてきた。『如浄禅師語録』の

「遺偈」にある「六十六年」が示寂の年齢として動かないので、逆算して隆興元年(一一六三)が出生年となる。しかし、佐藤秀孝氏の論文によって、(1)の宝慶三年(一二二七)〔古写本『建誓記』〕説が主張され、見直されつつある。もし、そうであれば出生年時は、紹興三十二年(一一六二)ということになる。

出身地については、『正法眼蔵』行持の巻に「先師天童和尚は越上人事なり」とあり、同じく「嗣書」の巻にも惟一西堂が「越上の人事なり(中略)、先師と同郷人なり」とあるので、越州(浙江省紹興府)ということになる。なお『如浄統語録』の跋に「師諱如浄、明州葦江人也」とあるが、この書は内容上、問題を含むので明州出身説は影が薄くなる。

如浄の出家年時や受業師、さらに修行地や修行内容などについては、記すところがない。前掲の『正法眼蔵』行持の巻に「先師よのつねに普説す、われ十九載よりこのかた、あまねく諸方の叢林をふるに、為人師なし。十九載よりこのかた、一日一夜も不礙蒲団の日夜あらず」とあることから、十九歳以前に出家し、十九歳に到って参師聞法の遍歴の旅に出たが、当初は師事するに足る善知識に邂逅しなかった様子である。

如浄が最終的に帰投した師は、雪竇智鑑(一一〇五)―一九二〇とすることになるが、それ以前に師事した諸師を『如浄語録』によって検出すると、松源崇岳(一一三二)―一二〇二と無用浄全(一一三七)―一二〇七との二師が挙げられる。

鏡島先生は、さらに拙庵徳光(一一二一)―一二〇三や遯庵宗演(入生没年不詳)などにも歴参したとする。これら臨済宗系の諸師に歴訪後、曹洞宗系の雪竇智鑑に帰投したのである。如浄が智鑑にいつ帰投し、何年随侍したのかは不明である。智鑑の雪竇山住持期間は、淳熙十一年から紹熙二年(一一八四)―一一九一)までの八年間であり、紹熙三年七月に示寂(『攻媿集』卷二一〇所収、「雪竇足庵禅師塔銘」)している。この時期に帰投随侍したことは、恐らく間違いないであろう。しかし、どのような機縁によって証悟し、嗣法したか、またその時期はいつか、それらも諸説あるが、実際のところ不明である。

次に如浄が晋住した寺院と年時であるが、これらは『如浄語録』によって推定され、伊藤慶道氏と鏡島先生との二説に代表される。今は、鏡島先生の説だけを次に表記しておく。

一、建康府(南京)石頭山清涼広慧禅寺

嘉定三年（一二二〇）十月五日入院

同八年（一二二五）秋退院

二、台州（浙江省）黄巖県瑞巖浄土禅院

嘉定八年秋入院

六ヶ月

同九年春退院

三、杭州錢塘県南屏山浄慈報恩光孝禅寺

嘉定九年春入院

同十三年（一二二〇）春退院

四、明州定海県瑞巖開善禅寺

嘉定十五年（一二二二）秋入院

同十六年秋退院

五、杭州南屏山浄慈報恩光孝禅寺

嘉定十六年冬再住

九ヶ月

同十七年秋退院

六、明州鄞県天童山景德禅寺

嘉定十七年秋入院

宝慶三年（一二二七）冬退院

〔紹定元年（一二二八）示寂〕

問題となるのは、如浄の天童山における入院と退院の時期である。『正法眼蔵』鉢盂の巻に「先師天童古仏、大宋宝慶

天童寺世代考(三) (吉田)

元年住天童日」とある上堂語は、『如浄語録』と一致している。大久保道舟氏は、無際了派の示寂（嘉定十七年秋）の翌年、宝慶元年（一二二五）春と見て、この点において矛盾はない。しかし、鏡島先生は、『如浄語録』に所載する上堂語の構成を分析し、結論的に嘉定十七年秋の入院説を採られている。

『如浄語録』の「明州天童景德寺語録」冒頭に所載する「山門・仏殿・方丈・勅黄・法座・提綱・結座・上堂」の各法語は、いずれも入院時のものである。この中、「結座」は『正法眼蔵』の「家常」と「鉢盂」の両巻と『永平広録』巻二に、「上堂」語の一部は『永平広録』巻一と巻七に各々引用されていることが、鏡島先生によって指摘されている。五山第三の天童山に入院する如浄の感慨が、これらの法語に横溢している。世代数は、三十一代である。

如浄の退院の時期については、宝慶元年説と同二年説と同三年説がある。宝慶元年説は伊藤慶道氏に代表されるもので、『如浄語録』を分析し、同年十二月八日仏成道日の上堂語を最後とし、次いで退院上堂したとする。『授覚心戒脈』の奥書「大宋宝慶元年乙酉九月十八日、前住天童浄和尚示曰」と『仏祖正伝菩薩戒作法』の識語にも同年月日を記して

「前任天童景德寺堂頭和尚授道元」とある中の「前任」がそれを裏づけられそうである。次に宝慶二年という新説は、前記の如浄示寂年時に關して触れた佐藤秀孝氏の説で(無準師範にあてた如浄の遺書を受け、師範が「上堂」した語を録す『仏鑑禪師語録』卷一「前任天童如浄和尚遺書至上堂」が宝慶三年に相当することから)その前年の冬には退院していたとするのである。確かに『正法眼蔵』諸法実相の卷に如浄の普説が「宝慶二年丙戌春三月」、妙高台においてなされている。

宝慶三年退院説は、鏡島先生に代表される。永平寺所蔵の「嗣書」に「大宋宝慶丁亥住天童如浄」とあって「宝慶丁亥」は同三年に当り、この「嗣書」を道元禪師が授与した訳でこの時、如浄が天童山の住持であったことを示す。

いずれにしても、如浄の天童山住持期に道元禪師が随侍して薫陶を受け、日本へ曹洞宗の禅風を呼吹したことは幸甚であった。「嗣書」授与の直後、道元は帰国の途に着いた。少なくとも如浄の示寂には立会わなかったのである。

如浄の示寂に關しては、冒頭に記す通り、無準師範へ送った如浄の遺書の到着時を無準の『語録』に照合して、佐藤氏の主張する宝慶三年(一二二七)七月十七日示寂という説が有

力であろう。興味深いのは、『枯崖漫録』卷上の逸話である。後於_二太白山_一感_レ疾退_レ席。下_二涅槃堂_一始大哭為_二鑑足庵_一焼香。入寂時。侍者告以_二法堂宝蓋鏡墮_一於座上_二曰_一、鏡枯禪至矣。如_二其言_一。〔統藏一四八、七八a〕

恐らく道元の下山後、病に罹り天童山を退き、涅槃堂(南谷庵の辺か)において、それまで嗣承を極力明かさなかつた如浄が本師足庵に焼香したのである。後席を継ぐ枯禪自鏡を予言するのは、その偉人振りの証左である。

辞世の頌「六十四年罪犯弥天、打_二箇踔跳_一活陷_二黄泉_一、咦、從來生死不_二相于_一」は、道元の遺偈「五十四年照_二第一天_一、打_二箇踔跳_一触_二破大于_一、渾身無_レ覓生陷_二黄泉_一」の部分と相似していることが指摘されている。

如浄の示寂に際し、参学門人であった無文道璨の「南庵主起棺」(『無文印』小仏事)や揖翁の「浄和尚塔」(『貞和集』卷一)等の偈が撰述されている。

如浄の法嗣および門人に關して、鏡島先生は上掲の論著で諸種の灯史を検討され、次の人々を列挙する。

まず法嗣として、①孤蟾如瑩、②石林_□秀、③無外義遠、④田翁_□頃、⑤自庵師楷、⑥永平道元、⑦癡翁師瑩、⑧雪屋正韶、⑨以道_□尊の九人を挙げ、その行実を記されている。

灯史中、『五灯会元統略』に記す鹿門自覺と雪庵從瑾、『仏祖宗派図』の承天短蓬遠、『正誤宗派図』の大慈鉄山は、各々誤解であると述べられる。

次に如浄の門人として鏡島先生は、伊藤慶道氏の『道元禪師研究』と中世古祥道氏の『道元禪師伝研究』の二論文を参照された上、以下の人々を挙げられる。

①文素、②妙宗、③唯敬、④如玉、⑤智湖、⑥祖日、⑦徳霑、⑧清茂、⑨徳祥、⑩広宗、⑪一書記、⑫璨禅客、⑬祖清禅人、⑭源山主、⑮亮蔵主、⑯覚兄、⑰虚堂智愚、⑱宗端知客、⑲広平侍者、⑳祖坤維那、㉑道如書記、㉒普園頭、㉓降禅、㉔道昇、㉕善如、㉖呂瀟、㉗張提拳、㉘寂円。

なお、縁西堂(清涼寺)と石鼓希夷(浄慈寺)の二人は、如浄の法幢を助化した道友であり除外している。如浄の道友として鏡島先生は、上掲の論著で明極慧祚(自得慧暉の法嗣)、掩室善開(松源崇岳の法嗣)、無準師範(破庵祖先の法嗣)、浙翁如琰(拙庵徳光の法嗣)、無際了派(同上)、簡翁嗣清(水庵師一の法嗣)といった人々を挙げている。枯禅自鏡も加えてよからう。臨済宗大慧派と虎丘派に属す諸師である。

佐藤秀孝氏は、「如浄会下の人々―嗣法・参学門人の追補(宗学研究28号)」の論文で、右の人々の他、次の諸師を挙

天童寺世代考(三)(吉田)

げている。法嗣には棘林把・損翁・無沢徳霑の三人を追加できるといふ。無沢徳霑は、前掲の門人中の⑦と同一人物である。参学門人には、右の他に石帆惟衍・方巖智垠・芝巖慧洪、太虚徳雲などを挙げる。さらに前後するが、外護者として、建康府主の黄度(字、文叔)、桐柏散吏の呂瀟、皇帝寧宗、皇后楊皇、宰相の史弥遠(字、同叔)も挙げられている。詳細は、上記の論文に譲りたい。

○如浄史料

(1)『如浄語録』には、次に示す諸種の異本がある。(イ)卍山道白註、延宝八年(一六八〇)刊、『天童如浄禪師語録』上・下二巻。首書本、卍山註並跋、江戸戸島惣兵衛版。巻首に紹定二年(一二三九)、桐柏散吏呂瀟の序(実は跋文)、巻尾に紹定元年開爐日、靈隠寺の高原泉の跋と同年中秋、天衣文蔚の跋、さらに延宝八年中元後、卍山の跋を附す。なお、刊記に「歳次己丑二六月初伏日小師広宗募刻板、臨安府靈隠景德寺住持祖泉校勘焉」とある。卍山の校訂によるこの『如浄語録』は、『日本統蔵経』二編二九ノ五『正統蔵経』一二四巻』や『禅学大系』第三巻、祖録部二(『如浄語録』二巻、序跋なし)、『大正新脩大蔵経』四八巻(『如浄和尚語録』二巻)に所収

- する。(ロ)面山瑞方校、明和四年(一七六七)刊、『天童淨禪師語録』一卷。改刻本、巻首に宝暦十三年(一七三六)、面山の序、巻尾に前記(イ)の天衣文蔚と高原祖泉の跋、および呂瀟の後序を附す。なお、面山は『天童淨和尚語録事略』を著し、卍山校訂本の写誤脱字等を多数指摘している。(ハ)玄峰淵竜撰、『如浄禪師語録夾鈔』五巻。筆写本、元禄三年(一六九〇)三校脱稿。巻首に延宝九年(一六八一)、梅峰竺信撰「如浄禪師語録校讎引」、貞享元年(一六八四)、中峰十八世孫碩竜撰の序文および自序を附す。さらに呂瀟の序は巻首に、また高原祖泉と天衣文蔚の跋を巻尾に各々附している。玄峰も卍山本の写誤脱字の他、前後の改易、語句の追加や削除等を指摘し刪定している。
- (2)『宝慶記』(豊橋市全久院蔵)の末尾に懷英筆の奥書があり、建長五年十二月十日、永平寺方丈で書写したものであることが知られる。道元が在宋中、師如浄との間で交された問答を記録している。年月日は、冒頭の「宝慶元年七月初二日、参方丈」のみが記され、他の問答にはないが、恐らくその頃から翌二年頃まで約一年間近くの参学記録とあってよいであろう。
- (3)『正法眼蔵』の諸巻に如浄関録の説示が多いのは当然である。如浄と道元との「伝記」に史料として間接的に採用される巻に「面授」の初相見(「大宋宝慶元年乙酉五月一日」)話、「諸注実相」の夜話(宝慶二年丙戌春三月)、さらに「行持」(下)の如浄における参学遍歴や紫衣師号を表辞する等の話がある。『如浄禪師語録』所収の上堂語の説示は「梅華」「見仏」「徧参」「眼睛」「家常」「優曇華」「転法輪」「虚空」「鉢盂」「安居」の諸巻に見える。
- (4)『枯崖和尚漫録』〔続蔵二―乙二―一八巻二四八〕巻上に「慶元府天童如浄禪師」の項がある。如浄の性向が「欣然豪爽」であり、叢林で「浄長」と称されたこと、真歇清了の塔に礼した偈、「示衆」、入寂時に師の雪竇智鑑に焼香したこと、後住の枯禅自鏡の感得が記されている。この『漫録』の記事が中国における如浄の伝記史料としては古い方に属するといえよう。
- (5)『無文印』(無文道璨撰)「小仏事」に如浄の起棺法語「南庵主起棺」、巻五に「天地雪屋禪師塔銘」中に「嘉定間、浄禪師倡足庵之道于天童」、巻十の「題跋附」に「跋天童淨和尚・寿無量墨跡」が見える。無文は、無

用浄全の弟子、笑翁妙堪の法嗣。如浄の清涼寺時代の門下。

(6)如浄に関する十四種の灯史、僧伝類とは次に列挙する通り。①『続伝灯録』卷三三〔正蔵五一、六九六a。続蔵一四二、一三六c〕の目錄に「足庵鑑禪師法嗣一人」として「天童如浄禪師一人」があるだけで伝記はない。②『増集続伝灯録』卷六〔続蔵一四二、四五五a〕には、『如浄語録』賛仏祖の「達磨賛」の一「拳達磨見梁帝因縁頌」を所載。③『五灯会元統略』卷第一上〔続蔵一三八、四二六a〕d〕には、前半に略伝、その後の大半は『如浄語録』に所載する上堂語類で占める。本書で問題になるのは、佐藤氏の指摘する如く、如浄の門下に鹿門覚を入れ、その機縁を『如浄語録』頌古より改変している点である。④『継統録』卷一〔続蔵一四七、三五七a〕c〕は、前記③に相似し上堂語が若干少ない。⑤『五灯蔵灯』卷一四〔続蔵一三九、三二三a〕c〕「雪竇鑑禪師法嗣」の「明州天童長翁如浄禪師」には、③と多少相違するが『如浄語録』に所載する上堂語(約十話)を組み合わせている。⑥『南宋明元禪林僧宝伝』卷七〔続蔵一三七、三四四c〕三四五a〕「天童如浄禪師」には、

天童寺世代考(三)(吉田)

前掲の灯史と異なる前文「如浄禪師、字長翁、奇逸有遠大志(中略)、六坐名坊、而浄慈天童最久焉。其陞座曰」があり、続いて『如浄語録』所載の上堂語を挙げ、末尾に「賛」を附す。⑦『続灯存彙』卷一一〔続蔵一四五、一二六b〕d〕は、前記③と大同小異。⑧『祖灯大統』卷七一(瑪瑙寺仰山房刊本)は、前記③を踏襲し(鹿門覚の機縁は除く)、新たに『如浄語録』から二頌を追加している。⑨『続指月録』卷一〔続蔵一四三、四〇二d〕四〇三a〕は、前期③に拠るも上堂語の頌は約三分の一に減少している。⑩『宗統編年』卷二四〔続蔵一四七、一八二a〕d〕には、乾道九年(一一七〇)の項に「如浄至雪竇参祖領悟」として足庵との契合を記し、さらに同九年の項に示寂とあるが、いずれも誤記である。伝記史料としては、杜撰で使用できない。⑪『続灯正統』卷三五〔続蔵一四三、四四七d〕四四八a〕も、前記③を踏襲し、⑦と同様に鹿門覚を如浄の法嗣とし機縁を所載する。⑫『五灯全書』卷三〇〔続蔵一四一、三六一d〕三六二b〕は、前記⑤と冒頭が同じであるが、上堂語が一頌を除き他の大半が相違する。注目すべき点は、『如浄語録』の所載順になっていることである。

⑬『寿昌正統録』卷三(水戸祇園寺蔵)も、前記③⑦⑩などを踏襲する。⑭『暗黒豆集』卷一「統蔵一四五、四二〇a-c」は、前記⑪を踏襲する。以上、如浄語録と灯史類との関係について、佐藤秀孝氏の「燈史上における『如浄録』の引用について」(宗学研究21号、昭和54年)の論文があり、詳細はそれに譲りたい。

(7)『寺志』卷三「二三二―三」には、元代の項「月坡明禪師」と「東巖日禪師」の間に「長翁浄禪師」の略伝がある。前記『会元統略』に所載する足庵との機縁「庭前柏樹子」(元は『如浄語録』の明州瑞巖寺における「入山法語―建法幢立宗旨」)の頌と『如浄語録』頌古の「金剛圈栗棘蓬」の頌とを所載し、末尾に「出世歴数刹後遷浄慈奉敕住天童。其法嗣石林秀孤蟾瑩等三人」とある。如浄を元代とする誤解は、清代末に浄慈寺境内(裏山)「元、如浄塔」にまで及ぶ。

(8)『統志』卷上「先覚攷」(一六丁表裏)には、「無際派禪師」の後、「枯禪鏡禪師」の前に所載。冒頭に「枯崖漫録、并師語録云」として、「師明州葦江俞氏子」とあるのは、『如浄禪師統語録』跋「師諱如浄明州葦江人也。俗姓俞氏子也」の文に基づく。以下は『枯崖漫録』と

『会元統略』さらに『如浄語録』に由来する。その後に「正語」の記を付し、道元の師事、前志の元代に置いた誤りを記す。

(9)『伝光録』「第五十祖天童浄和尚」章は和文による伝記であるが、前掲の中国撰述灯史類の引用書は不明。主に『宝慶記』や『正法眼蔵』であり、『如浄語録』は使用しなかった趣きである。

(10)『洞谷記』には、如浄の示寂に関し、「天童浄和尚。大宋紹定二年己丑。七月十七日逝。日本寛喜元年。今至元亨三年。九十五年也」との説を出す。その後、「洞谷伝灯院五老悟則并行業略記」の冒頭に「高祖」として如浄の略伝を漢文体で所載する。「高祖。大宋国裏。明州天童。三十一代和尚。諱如浄。越上人。十八歳。捨_レ教学。参_レ祖席。聞_レ雪竇足庵之化盛。参勤不_レ群」と、十八歳足庵帰投説を立てる。その後には付す機縁「不曾染汚処」の話は前記『伝光録』にもあるが、その出拠が不明である。末尾に「今安_ニ師語録当山。擬_ニ靈于骨」と記されている。『如浄語録』の存在は知っていても積極的に伝記史料として使うことはしなかった訳である。

(11)如浄に関する研究論文として、鏡島元隆先生著『天童如

浄禅師の研究』(春秋社、昭58)の巻末付録に「如浄関係研究文献一覧」があり、「一、語録」十編、「二、伝記」十編、「三、思想その他」十八編が列挙され、当時までの研究動向が窺えて便利である。

その後、続く研究論文を手近な論集から挙げておこう。石井修道「史弥遠と禅宗—如浄の五山入院の背景を中心として—」(宗学研究26号、昭59)、伊藤秀憲「道元禅師の在宋中の動静—如浄との出会い—」(印仏研32—1、昭58)、同上「道元禅師の在宋中の動静」(駒大仏教学部研究紀要42号、昭59)、鏡島元隆「道元禅師とその周辺」中の第14章「道元禅師の在宋中の行実」(大東出版社刊、昭59、佐藤秀孝「如浄禅師再考」(宗学研究27号、昭60)、同上「如浄会下の人々—嗣法・参学門人の追補—」(宗学研究28号、昭61)、同上「如浄禅師示寂の周辺」(印仏研34—1、昭62)、吉田道興「高祖道元禅師の如浄禅師よりの伝戒に関する問題点」(宗学研究30号、昭63)、石井修道「宋代禅宗史の研究—中国曹洞宗と道元禅—」中の第四章・第三節「『宏智録』と道元禅」・第七節「大休宗珙と足庵智鑑」等(大東出版社刊、昭62)、佐藤秀孝「如浄会下の道元禅師—身心脱落と面授—」(印

仏研37—2、平成元年)、伊藤秀憲「『宝慶記』と問と答—道元禅師の他の著作への影響—」(『鎌田茂雄博士還暦記念論集 中国の仏教と文化』大雄出版刊、昭63)、吉田道興「『宝慶記』における叢林生活の一考察」(同上)、池田魯参「『宝慶記』—道元の入宋求法ノート—」(大東名著選16、大東出版社刊、平成元年)

枯禅自鏡

枯禅は、閩州(福州の古名、福建省)長楽の人、俗姓は高氏(『増集続伝灯録』巻二)という。『継統録』巻二では「長溪高氏子」とある。

受業師に関し、右の『継統録』は「泉州法石」へ生没年不詳と記すが、年時不明である。後に諸方を遍参している。臨済宗大慧派の木庵安永(一一七三—一一七六)、同楊岐派仏智瑞祐の法嗣・水庵師一(一一〇七—一一七六)、同楊岐派此庵景元下の或庵師体(一一〇八—一一七九)に参謁し、最後に靈隠寺在住時の臨済宗大慧派に属す密庵威傑(一一一八—一一八六)に相見し機縁が契い嗣法した。

『増集続伝灯録』に拠れば、止住寺院について、隆興(江西省南昌県)上藍寺に出世開法し、さらに建康(南京)旌忠寺、撫州(江西省南城県)白楊寺、福州の太平寺・西禅寺に

歴住している。『継統録』では、「寧徳鳳山」に住すとあり、前記の隆興上監寺といずれが正しいか。不明である。

その後、『増集統伝灯録』に記す如く、宝慶元年(一二三五)、杭州(浙江省) 靈隠寺に勅住している。『扶桑五山記』の「靈隠住持位次」には、三十世として「三十 枯禪(智鏡)鏡禪師」と所載する。『武林靈隠寺志』卷三の「住持禪祖」には、載っていない。恐らく、靈隠寺には、宝慶三年(一二二七)七月まで在住し、次に景德寺へ転住したことが推定される。ただし、異説として『継統録』には、「紹定己丑移真州北山」後移天童甫至而寂建塔天童」とあって、紹定二年(一二二九)に真州(不明、真郷・陝西省葭県西か)北山へ移り、その後天童山景德寺へ転住し、到着直後、間もなく示寂した、とする。

如浄の示寂時に関する諸説は前述した如くであり、『枯崖漫録』卷上には、その際、侍者が法堂の宝蓋の鏡が座上に墮ちたことを告げると、如浄は「鏡枯禪至」と述べたとあった。これによって、枯禪の天童山への入院は、如浄寂後のことであることが判る。ただ、その時期が、宝慶三年(一二二七)か、紹定二年なのかは不明である。もし、紹定二年であれば、天童山は、その間、無住であったということになる

う。

『増集統伝灯録』卷二に拠れば、天童山における「上堂」語は、次の通りである。

有句無句、如藤倚樹、樹倒藤枯、句歸何処。良久、長憶江南三月裏、鷓鴣啼処百華香。

なお、同書や『統灯存稟』卷二、それに『寺志』では、この他に二つの「上堂」語が付載する。また『統伝灯録』『統灯存稟』『寺志』などには、さらに「作上鐘偈」が付されている。『枯崖漫録』には、前掲の「上堂」語・偈の他、二箇所(卷中・卷下)に枯禪の言動が記録されている。その中、後者には、枯禪の人格の一端と学人接化の気迫が反映されていると思われるので、次に掲げておく。

枯禪鏡禪師、天資淡薄、一無嗜好、惟与衲子、提撕敲磕不倦。

有問、如何是祖師西来意。枯禪拍禪床一下、今人吐露語言千百、皆不能得到前輩地位、且利害在什麼。処会麼。

枯禪の寂年および年寿などは不明である。前掲の『継統録』に拠れば、紹定二年(一二二九)以後、天童山に入院し、その後、間もなく示寂したという。天童山の止住は、短期間

であったことが知られる。示寂後、その塔は、天童山の中峰にあった本師密庵威傑塔の左に建てられ、枯禅の法嗣である愚谷元智八一一九六一二二六六の「礼塔偈」がある（『寺史』巻七）。

枯禅の法兄弟（密庵の法嗣）として、『続伝灯録』巻三十五には、枯禅を含め九人を挙げている。靈隱崇岳・臥龍祖先・薦福道生をはじめとし、浄慈慧光・隠静致柔・蔣山慶如・靈隱了悟・侍郎張居士の八人が、法兄弟ということになる。道友には『枯崖漫録』が手懸りになる。まず撰者の枯崖をはじめ、井出密・東山源・龍溪聞などと接触していることが知られる。この中、井山密は、枯禅と「俗門之姪、法門之嗣子也」（同書巻中）にある通り、従兄弟の關係にある。法嗣には、愚谷の他、西禅円、寂窓有照・清溪沅・公安錫・太古先・岳翁澹などがいる。法嗣の中、西禅（月窓）円が、後に天童山に住院したという。なお、門人としては、『枯崖漫録』巻下に見える別翁甄がその一人に数えられる。

○枯禅史料

- (1) 『枯崖漫録』（続蔵一四八一巻上（七八a）・巻中（八二b・八三a・八七b）・巻下（九一a））枯禅の道友である枯崖の『漫録』が最も古い史料である。

天童寺世代考(三) (吉田)

- (2) 『続伝灯録』巻三五（正蔵五一、七〇八a）の「天童枯禅自鏡禅師」には、「福州高氏子」とあって、その後に「作上鐘偈」の一偈があるのみ。

- (3) 『増集続伝灯録』巻二（続蔵一四二、三八五b）の「四明天童枯禅自鏡禅師」には、俗姓・出身・参学師・出世道場と記述後、「宝慶元年被旨陞靈隠移天童」とあり、靈隠寺から景德寺へ転住したことを叙べる。その後、「上堂」語の三偈を所載する。

- (4) 『五灯会元統略』巻五（続蔵一三八、四七二a）「慶元府天童枯禅自鏡禅師」(2)と同じ。

- (5) 『五灯厳灯』巻二四（続蔵一三九、四六六b）(2)(4)と同じ。

- (6) 『継統録』巻二（続蔵一四七、三六八c）には、「長溪高氏子」の後、「受業泉州法石」とあり、続いて「後遍参諸方、得旨於密庵、出世寧鳳山、嘉定癸未移鼓山鑄洪鐘有挂鐘偈」として(2)の「作上鐘偈」があり、末尾に「紹定己丑移真州北山後移天童甫至而寂、建塔天童」とある記事は、枯禅の天童山入院と示寂年時を推定する史料として重要。

- (7) 『続灯存彙』巻二（続蔵一四五、一三三b）「明州天

童枯禅自鏡禅師」には、(3)を踏襲し、末尾に(2)の偈を付す。

(8) 『統指月録』卷三〔統蔵一四三、四一二a〕b〕「慶元天童枯禅自鏡禅師」は、(2)と(3)の合糅といえる。

(9) 『寺志』卷三〔二一六〕七〕には、伝記「補略」があり、(3)を踏襲。末尾の法嗣に虎溪錫、松窓照、日窓円等の五人がいる、とある。同卷六〔四三二〕四〕には(3)の「上堂」語三則と二頌を付す。同卷七〔四九六〕には「枯禅鏡禅師塔」があり、その位置と法嗣愚谷の「礼塔偈」が所載する。

(10) 『統志』卷一〔十六丁左〕「先覚」には「決疑」として「鄒応伝、撰師、語録序曰、照子落地、識住天童」とあり、その後「与長翁浄伝云」(『枯崖漫録』)の如浄示寂時の逸話を所載する。

△続く▽